

小檜山政克教授退任記念講義

『社会主義思想の命運』

小 檜 山 政 克

ただいま学部長からご紹介いただきました小檜山です。今日は学生諸君は試験の前で大変お忙しいところ、あるいは先生方はそれぞれお忙しいところ、わざわざおいでいただきましてありがとうございます。これから「社会主義思想の命運」という題でお話をさせていただきます。

1980年代の後半、特に去年ですが、ソ連邦、東ヨーロッパの激変というのは、20世紀における社会主義の失敗を意味していると考えられます。多くの人はこれを、資本主義と社会主義の対抗の中で社会主義の敗北、資本主義が勝利したものだということに見なしています。そういう考え方もあり得ると思います。だがそれとは全く違った観点からこのような社会主義の失敗を受け止めることもできると思います。それはどういう観点かといいますと、それはもっと広く長い長い人類解放の歴史の中で、今ここで非常に大きな一つの実験が失敗したという受け止め方です。人間が幸福な社会を作っていくための努力、それは長い歴史であります。その歴史の中で人間は、例えば近代を取って見ても17世紀のイギリス革命、18世紀のフランス革命、19世紀のパリコンミュンというふうないろいろな挫折（イギリス革命、フランス革命が簡単に挫折とは言えないけれども）と闘いを繰り返してきました。そして今度の実験の失敗というのは、例えばパリ・コンミュンなどとは違って、70年近く、しかも権力を取った、それまで虐げられていた階級が一生懸命に自分達の理想を実現しようとしてやってきた、そういう実験が失敗したわけであります。だからこれは非常に大きな失敗です。だけれども、人類というのはやはりこういう失敗を繰り返しながら前に進んでいくものだとは私は考えています。こういうふうな立場に立ちますと、

今我々がなすべきことは、この失敗した実験を詳しく分析して、そこから新しい結論を引き出して、人類解放の歴史の次の段階に立ち向かうことだというふうに思います。

実は、私が今日のお話の中で申し上げたいことはこれに尽きるのでありまして、後は蛇足になるのですが、もう少し言わせていただければ、私は普通の講義では教員が政治的信条を学生諸君に押し付けることは避けなければならないと思っています。なぜならば学生は、マックス・ウェーバーの言うように、反論の機会がなかなか与えられないからです。ということで、そういうことは避けてきましたけれども、あえて今日の特別講義で言わせていただければ、できるだけ皆さんが私のこのような考え方に賛成していただいて、一緒にやろうというふうに思われる方が一人でも多く出ることを、正直希望しているわけです。

実はソ連、東欧の社会主義はなぜ失敗したのか、その原因を突き止めて人類解放の新しい段階、あるいは社会主義再生と言ってもいいのですが、社会主義再生の次の一步を準備しなければならないという問題に真っ正面から対決して、どうしてもその問題と取り組んでいかなければならないというのは、私にとってそれ無くしては生きていけないというようなテーマであります。私はゼミの学生諸君にいつも言っているのですが、そのテーマに取り組まなければ生きていけないようなテーマを発見しろ、そういうテーマを選べと、いつも言っています。これは正直いって受け売りなのですが、私の先生であった上原専祿先生がそういうことを言っていて、私自身もそれを真似して言っているのですが、社会主義をどう考え直して我々が次の一步に踏み出すかという問題は、実はそれなくしては私にとっては生きていけないテーマです。多くの先生方が定年の時の講義で、私の哲学的遍歴とかいろいろなことを言っておられます。それもそれで結構なのですが、私にとってはとてもそういうことを言っている暇はありません。私としてはやはりこの問題をどうしてもやっつけていかなければならないというふうに思っています。

実は、私がなぜ経済学の勉強を始めたかといいますと、私自身多感な青年時代は敗戦直後でした。今でもよく覚えているのですが、その時町は荒廃の極で

した。外食券食堂というのがありました。当時は配給券を持っていかないと外では食べられません。その外食券食堂の前に長い長い列がありました。みんな飯ごうをぶら下げていました。戦争から帰った人たちが飯ごうをぶら下げて長い列を作って、そして順番がくればおかゆを貰うという状況だったのです。私はそれを見て、本当にみんながこんな生活の苦しみが無い豊かな社会を作るにはどうしたらいいかということを一生涯懸命考えようとしました。そのために私は経済学を勉強しようという気になったわけです。だから経済学で飯を食おうというようなつもりはなかったのです。実際はこの20年それで飯を食ってきたわけですが、しかし私のつもりはそういうことでした。

したがって私がこの20年を経て今お話をするという事は、そういう自分の問題と結び付いているわけです。私は例えば学生時代に『資本論』の3巻をドイツ語の原書で勉強しました。翻訳はほとんど読まなかった。これは先生に原書で読めと厳しく言われてそうしたのですけれども、実は私のその時の若いなりの気持は、もし翻訳者が間違った『資本論』の翻訳をすれば、その間違った『資本論』を読んで、自分が間違ったマルクスの理解をする。すると自分の一生は台なしになってしまう。それは訳者の責任ではなく自分自身の責任ですから、自分自身でマルクス自身の言った言葉に取り組もうというつもりでドイツ語で勉強をしたのですが、これはやはりなかなか気持だけはそうであったのですが、十分に勉強できたかは別です。

私はいま、人類解放の歴史ということを申し上げたのですが、人類解放の歴史というのは、実は私が大学へ入った時のゼミナールの先生の大塚金之助の言葉です。あまり他の人はそういうことを言っていないのですけれども、『解放思想史』、これは戦後復刊された岩波新書の第1号に『解放思想史の人々』というのがあります。当時私が買った本はここにもってきたものよりもっときれいな本だったのですが、私が外国に行っている間にどこかにいってしまったので最近古本屋で買いました。人類解放思想史ということ、大塚金之助は言いました。大塚金之助は、この『解放思想史』の前書きの中で「人類解放というのは、広く人種的、民族的、政治的、警察的、宗教的、性別的、社会的、階級

的な圧迫、迫害、無知、偏見、及び迷信からの解放のことである。」と言っています。大塚金之助の解放思想史の中には、ベンジャミン・フランクリンからベートーベン、ワグナーまでいろいろたくさん入ってきますので、とてもそれを全部私は勉強できないのですが、そういう解放思想史の中の一つとして、この社会主義思想があるというふうに私は考えています。

この大塚金之助先生は、私の学生時代にゼミの先生でしたから吉祥寺の先生の家へしょっちゅう行きました。私どもが学生の時に好きだったシューベルトの“リンデンバウム”という歌がありました。これはウィルヘルム・ミュラーの詩にシューベルトが作曲したのですが、そこに「嬉しい悲しに訪いしその影」というのがあります。嬉しいとき悲しいときにその菩提樹のところへ行ったということで、私も嬉しいとき悲しいときにその先生のところへ行きました。そして先生といつも話をしました。正直いま思い出してみても、学問的な話で教えた覚えは一度もありませんでした。人間的な話でした。そういう意味では私は甘えていました。いまの立命館の学生諸君は、とてもそういうことはなかなかできない。私よりもっと大人で厳しい条件にあると思います。

したがって私は大塚金之助（私にとっては先生ですが、皆さんにとってはそうではないから、ここでは先生をつけません）を、大袈裟に言えば膚で知っています。もっと別の言い方をすれば、私は貧乏な教師の家に生まれました。大塚金之助も貧乏な家に生まれて非常に苦勞をしたのです。だからお互いの貧乏人同士で、私は大塚金之助という人間を膚で知っているわけです。この大塚金之助は、また短歌を作りました。ここに『人民』という歌集があります。これは彼が死んだ後で弟子及び友人、知人が集まって作ったものです。この中で私が一番好きな歌はこういう歌です。

“まづしさにありてすどくものを言ふこのたましひをまぐるとおもふか”

という歌です。「まぐ」というのは、うち砕く、屈服させるという意味でしょう。

大塚金之助という人は非常に貧乏でした。今の神戸大学（当時の神戸高等商業学校）に入ったのですが、貧乏ですから奨学金を貰わなければやっていけませ

ん。それで図書館へこもって一生懸命勉強したのです。そのうちに彼は校友会の雑誌に、エンマ・ゴールドマンという社会主義者、むしろ無政府主義者についての論文を書きました。それが学校の大問題になってしまい、結局奨学金をうち切られたのです。学校は多分彼をかばってくれたと思うのです。しかし文部省に対してまずいということで、彼の命の綱であった奨学金を断ち切られた。けれどもその後東京高等商業の専攻部に行って、そして外国に留学して、帰って来て昔の東京商科大学で経済原論の講義をしたのです。この歌はその経済原論の講義を始めた頃、「苦学を終りて10年を経たり」という題でできた歌です。そういうふうな講義をしていたのですけれども、結局非常にそういう点でまっしぐらにやったために進歩的教授として追放されて（昭和8年だったと思う）、戦争中は非常に苦しい生活をしました。戦後学校に帰ってきて我々の指導をしてくれたわけです。

私はこの“まづしさにありてすどくものを言ふこのたましひをまぐるとおもふか”というのは、学生時代の彼の状況、それから昭和の初めに彼が一生懸命教えたマルクス経済学。そういうことのなかでの彼の個人の気持もあります。これは同時に社会思想というか、本当に正しいことを教えようという気持が、結局こういう彼のほとばしりとなって歌になっていると思うのです。なおもう一つ大塚金之助の歌で“わが母をそぶりあらはにさげすめるたけだけしさも許さねばならず”というのがあります。ですから人間は、そういう苦しさの中で自由と平等を願って闘ってきたと思います。

それで今日の私の講義は、こういう人類解放の思想の中の社会主義ということですが、本来は近代の社会主義思想というのは17世紀、18世紀、19世紀と来て、そして20世紀、あるいは19世紀のマルクス、エンゲルスから今世紀のレーニン、スターリン、ゴルバチョフと全部、社会主義思想の命運というからには話をしなければならないのですけれども、私はそんなにたくさんのは勉強できていませんから、今日のお話では近代社会主義の始祖と言われているイギリスのトーマス・モア、それから17世紀のイギリス革命の時のレベラーズ、特にその中のディガーズ、それから18世紀のフランスのモレリー、19世紀

のシャルル・フーリエ、こういう人たちの思想をたどって、社会主義というのはどういう考え方ができたのかということを見て、一番おしまいに今日の日本国だけではなくて他の国でどういうことを考えているかということについてごく簡単に見て、自分なりの現段階での結論を皆さんにお話ししたいと思います。

トーマス・モアの解放思想が述べられている『ユートピア』は、日本語では岩波文庫で翻訳があります。もともとラテン語で書かれたのですが、この翻訳は何百年も前のロビンソンという人の英語の訳からの重訳になっています。『ユートピア』については、たくさんの本が出ています。日本語の本については、皆さんご存じでしょうから申し上げません。ここにロシア語の本を私は持ってきたのですが、これはオシノフスキーという人の『トーマス・モア』です。これが最近日本語に翻訳されたようです。こういうふうにもいろいろの本があります。この中で今日私が参考にしたいと思っているのは、カール・カウツキーの『トーマス・モアとユートピア』です。カウツキーというのは、何かレーニンに批判されて修正主義者だとおもっておられるかもしれないけれども、レーニンのカウツキーに対する批判というものは1917年の革命前後なので、若い頃のカウツキーというのは農業問題でもいい仕事をしています。これは法政大学の「りぶらりあ選書」というのがあって、いろいろいい本を出しているその一つです。

ただ、カウツキーは「近代社会主義の始祖としてのユートピア」という言い方をしています。大塚金之助の人類解放の思想からいうと、もう少し広いのです。したがってこれはそういう意味では狭い点はありますけれども、今日は社会主義という観点からユートピアの話をしていこうと思います。

ユートピアの題には、当時の書物の例にならって、たいへん長々と「世界に名ある町ロンドンの市民にして、市の助役たるたぐいなき傑物、この上なく雄弁なるトーマス・モア著すところの社会の最良の状態と、健康で楽しい新たに発見されたるユートピア島についての正真の黄金の書物」と書かれています。カウツキーは、トーマス・モアの世界社会主義の基礎になっているものとして、「昔の共同体主義に対応するところの人懐かしい性格」というふうを書いてい

ますが、しかしこの翻訳では「人懐かしい性格」ということで面白い翻訳なのですが、ドイツ語で私は見ていませんのでどういうドイツ語を使っているのかよく分かりません。モアの社会主義の基礎になっているのは「人懐かしい性格」、それから「労働者に不利益を及ぼす資本主義の弊害が特に際立った形態で現れた英国の当時の経済情勢」、そして「古典的な哲学思想と実際の経済家としての見事な統一だ」というふうに言っています。

カウツキーの整理を参考にしながら、トーマス・モアのユートピアの中に現れている解放思想というのを見ますと、これは少し単純化することになりますが、一つは「私有財産の否定」です。もう一つは「労働時間の短縮と全員労働制」です。3番目は「商品交換や貨幣や金の追放」、4番目は「学問の尊重」になると思います。この私有財産に始まる3つの点について、これから考えてみたいと思います。

ユートピアについて物語るラファエル・ヒスロディは、第1巻の終わりの方で次のように言っています。「プラトンの慧眼は、あらゆるものの平等が確立されたら、それこそ一般大衆の幸福への唯一の道であることを見抜いていたのです。そしてこの平等ということは、全ての人が銘々自分の私有財産を持っている限り決して行われないと私は考えています。いろいろな権利や口実を設けては、できるだけ多くのものを寄せ集めかき集め、ありとあらゆる富は少数の者たちだけで山分けする、そういった国ではいくら豊富に蓄えがあっても少数のもの以外の者にはただ欠乏と貧窮が残されているばかりです。しかも多くの場合この後者の貧乏人の方が、前者すなわち金持ちなどよりも一層幸福な生活を楽しむ権利があるのです。なぜかと申しますと、金持ちは貪欲で陰険で非生産的であります。貧乏人は謙虚で純情で日々労働によって自分の利益そのものよりも全体の福祉に多大の貢献をしているからです。こういうわけで、私有財産が追放されない限りものの平等かつ公平な分配は行われ難く、完全な幸福も我々の間に確立しがたいということを、私は深く信じて疑いません。私有財産が続く限り、大多数の人間の背には貧乏と苦難の避くべからざる重荷がいつまでも残るでありましょう」というふうに言っているわけです。これは要する

に初期の資本主義の利潤追求に対するモアの弾劾であります。そしてそういう追及の根源を私有に求めています。ただ、モアがなぜこのように激烈に私有財産権を弾劾するのか。これは今読み上げた文章の中にその根拠は出ているのですけれども、しかし我々としては、モアのこのような主張の歴史的な、宗教的な、思想的な、あるいは時代的な背景を解明しなければならないわけです。なぜあの時にモアがあのようなことを言ったか、現在の我々にとってどうかということです。本当は中世の所有論から宗教的な問題から研究していかなければ、これはできないと思うのですが、これは私にはできていません。

ところで『ユートピア』では、そういうふうに私有財産を否定する主張に対して、対話者が次のように反論するわけです。「しかし私はむしろ反対の意見を持っているのです。私は一切のものが共有であるところでは、人間はかえって幸福生活を営むことができないのではないかという気がします。と申しますのは、各人が労働にあまり精を出さないところでは、果たして物資その他のものが豊富にあり得るでしょうか。自分の利益と言う概念があればこそ仕事に精をだすのですが、他人の労働をあてにする気があれば、自然に人は怠け者になるだろう」というふうに言っています。

この問題について言いますと、実は西沢富夫という社会主義経済学者がいました。私が学生の時から先生でしたが、大塚金之助が一橋に彼を呼んで将来を嘱望していたのですが、彼は当時の情勢から大学の先生になる道を振り切って、共産党の国際問題その他の活動家になりました。そして最後には日本共産党の中央委員会の副委員長、それから社会科学研究所所長ということになされたのですが、その西沢先生と私は国立にあった学校のグラウンドの芝生に坐って一緒に弁当をひらきながら話をしたことを覚えています。「もっと平和な時代になったら僕はロシア語の先生をやりながら文学をやりたいのだけれども、今はできない」と言われたのを覚えています。その時はそういう情勢だったので。この西沢先生は1985年11月7日に亡くなりましたが、亡くなる少し前に私が家に行っているいろいろ御馳走になって話をしました時に、「本当に生活が保障されたような世の中になってしまったら、人間は働かなくなるのではないだろ

うか」というふうに言われました。これは当時社会科学研究所長であったし、共産党の幹部の人ですから、そういう人がそういう個人的なところで言ったことを、こういう公の場で言う方がいいのかどうか知りませんが、既に亡くなっておられますので、それから私は西沢富夫の「不肖」の弟子ですから、先生がそういうふうに思い残して亡くなっていったそういう課題を、やはり受け継いで解決していく務めがあります。したがってここで言うわけです。

ここでモアに返って、モアはロンドン商人の代表として活躍したこともあるわけですが、その約250年後で、かの有名なアダム・スミスが人間の経済活動の原理として利己心について述べました。この利己心についてトーマス・モアも知らなかったはずはないのです。いま利己心という問題と私有財産権が強く結び付いているということを一応前提にすれば、私有財産権というのは社会の人々の完全な幸福にとって最大の障害なのか、それとも活発な経済活動と進歩の原動力なのかという根本問題がここに横たわっているわけです。モアはこの問題に対してどう答えているのかと言いますと「ユートピアに行ってみなければ、そういうことは分からない」と言って、第2巻で具体的なユートピアの姿を描いていくわけです。この辺がユートピアのユートピアたる所以なのですが、ずっと後の10月革命、社会主義革命の後で、レーニンが同じようなユートピア論、ロマンチズムを共産主義労働に関して述べています。この点については、レーニンは冷血な人のように思っておられるかもしれないけれども、非常にロマンチストであり非常にユートピアンだったのです。

ただレーニンのユートピアニズムが好きだと言っていたのでは始まらないので、今日の我々は去年の社会主義のあの失敗の後の今日ですから、それを冷静に分析しなければなりません。人類の一員としてそれは責任があるわけです。勿論これまでソ連では私有財産一般を否定してきたわけではありません。遺産相続も認めてきました。ただ生産手段の私有とそれに基づく搾取を禁止してきただけです。それから労働への外的刺激として、いわゆる「能力に応じて働き労働に応じて受け取る」、つまり働いた分だけ受け取る、働かなければ駄目だということを社会主義の大原則としてきたのですけれども、しかしソ連では、

この20世紀の社会主義では、やはりあの企業家精神の占める場所はなかったと思います。

この辺になるといつの時代について話しているのか歴史的に前後が混乱してくるのですが、つまり『ユートピア』では人々が競い合って新しい技術、新しい生産方法を見つけ出して、それを取り入れて社会の生産力を発展させ、人々の生活を向上させ豊かにしていこうという観点がないのです。ここでは人々は生活に必要な物資の生産に従事した残りの時間は、もっと人間にとって楽しいものである知的生活に充てるということであって、人間が貪欲になるのは、欠乏に対する不安と虚栄心のためだけれども、ユートピア人はそういうようなことには全く無縁なのだ。一日6時間働けば後はもっと高級な仕事をするのだ。誰もが働き、働かざる者は食うべからずだから6時間働けば十分だと。それでユートピア島ではどこかに物資の不足するところがあれば、他のところから何らの対価も報酬もなしに自由に融通してやることになっていると。つまりユートピア島には商品経済もなければ貨幣もない。それでユートピア人は「金で便器を作る」と。これはレーニンが10月革命の後で「将来共産主義になったら、世界の各都市に金で共同便所を作るのだ」ということを言ったという有名な話ですが、このレーニンの話はやはり『ユートピア』を頭に入れながら、そういうことを言っていたと思います。

そしてレーニンも1917年の革命の後には、すぐ貨幣経済がなくなると思っていたのです。ところが実際はそうはならなかった。

このように見てきますと、やはり我々はトーマス・モアのユートピアの中に中世的な共同体思想、それから物質的欲望を抑制することを美德とする思想を見付けざるを得ません。1516年にこの本が世に出て以来500年近く経っています。その間に資本主義経済は社会の生産力を劇的に発展させ、人々の物質的生活と精神的生活を大きく作り替えてしまいました。人類の解放思想もこのような中で発展を遂げなければならない。それは中世的な共同体思想を抜け出して、個人の自由を基にした連帯と友愛、平等の思想、さらには物質的生活の向上を求める思想を基礎にしなければならないと思います。だから我々は社会主義の

失敗を考える時、それがこのような中世的なユートピア思想の影を引きずっていたということが一つの問題であると考えざるを得ません。

ここで資本主義の発展という時に、20世紀末現在の資本主義は、マルクスが『資本論』を書いた19世紀中葉の資本主義、レーニンが『帝国主義論』を書いた20世紀初頭の資本主義とも違います。どう違うのかというと、これもまた大問題ですけれども、やはり我々はその現実をリアリスティックに認識して、そこから出発しなければなりません。要するに資本主義は違ってきているわけです。おおざっぱに言えば現在の社会は中世的・封建的な関係が一掃されて、高度な生産力とそれにふさわしい、それなりの民主的な人間関係をもっているわけです。そうすると今度は、資本主義における経済の素晴らしい発展の原動力を探る時に、我々はどうしても先程言ったアダム・スミスの利己心に注目しなければならぬのですが、そうすると問題は利己心と利他心、私有財産権と公共の利益の関係をどう見ていくかという問題が必然的に出てくるわけです。そこから出発しなければならぬのです。

この点でどう考えるかという点、レーニンはこの点でもユートピアンでした。例えば10月革命直後に執筆した1919年の『偉大な創意』とか、1920年の『旧制度の破壊から新制度の創造へ』の中でレーニンは次のように言っているのです。「共産主義とは、自発的な意識的な団結した労働者たちの、資本主義よりも高い労働生産性のことである。共産主義は普通の労働者たちが自分の身近な人々のことではなくて、遠く離れた人々、つまり全社会のパンに配慮し始めるとき、その時に初めて始まる」という言い方をしているわけです。それからまた「共産主義労働とは、言葉のより狭い厳密な意味では、報酬の計算も報酬の条件もなしに行う労働であり、公共の利益のため習慣で、また公共の利益のための労働の必要性についての意識的な態度によって働く労働であり、健康な体の欲求としての労働である」。こういうふうにレーニンは言うのですが、レーニンは労働態度を問題にするのですが、では社会主義で労働者はどうしてこういうふうな新しい労働態度を取れるようになるかという点、レーニンに言わせれば「それは労働者が自分たちで生産手段を所有して、資本家の搾取から解放

されて生産の主人公になったからだ」と言うのです。正直いってこの辺はレーニンにとってその時は無理ではなかったのですが、非常に公式的でありませぬ。

ここで所有というのはどういうことかということが、経済上の問題としていろいろ出てくるのですが、単なる法律的な意味ではなくて、我々が所有ということを見ていく場合に、経済的な意味、つまり生産者が生産手段を自分の意図と目的にしたがって利用し、生産したものを自分のものにするという意味にとらえる必要があるわけです。そうすると経済的なメカニズムが問題になります。どこからどのような機械や原材料を仕入れて、どれだけの労働力を集めて、何をどのようにどれだけ生産するのか、出来たものをどこにどれだけ供給するかというメカニズムが、結局人々の労働意欲、生産性向上、技術進歩を刺激するように働くことが肝要なのです。そして、これまでソ連の社会主義経済の中でも物質的刺激とか利潤方式とか、様々な方法がこのために提案されてきたのですけれども、結局これまでのソ連の計画経済方式の中では、問題の解決に成功しなかったわけです。

トーマス・モアのユートピアから今のソ連の話になってしまったのですが、それでは、それと違ったもっといい計画経済方式があるのかということですが、その場合私が今考える最も重要なことは、我々が人類解放の歴史を前に進めようとする限り、その経済体制あるいは方式は、個人の人格と自由の尊重、全ての人の平等、人々の物質的・精神的・生活の充実と向上といった、人間にとって一番大切なことを保障する、そういう方向をめざすものでなければならない。個人の尊重ということ、経済体制の問題として見るならば、結局一人一人の自発的創意が尊重され発揮されるようなメカニズムということです。それは上からの計画経済とは別のものです。各人の利己心と万人の平等とは本来対立せざるを得ないだろうけれども、しかし一人一人の創意と全体の発展というのは矛盾なく進むことができるのではないかということです。もう一度言いますと、一人一人の利己心と万人の平等というのは、本来対立せざるを得ないけれども、しかし各人の創意（イニシアティブ）と全体の発展は矛盾なく進むことができる

のではないかということです。

この問題は、実はマルクスが『共産党宣言』の中で「各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件であるような一つの協同社会」と言っている問題にも絡んでくるわけです。時間がないので学問の尊重という問題は省略します。

次にウィンスタンリの思想ということに入ります。イギリスは今では非常に民主的な国と思われていますけれども、世界で一番最初に国王の首を切り落としたのはイギリスの民衆で17世紀です。1649年にチャールズ2世を処刑したのですけれども、その頃にジョン・リルバーン率いるところのレベラーズつまり平等派の運動と、それよりもっと左翼のディガーズと呼ばれた人達の運動というのがありました。レベルというのは、要するに平等にするという動詞で、そこからきたレベラーズで平等派です。これはイギリスの17世紀の革命、ご承知のクロムウエルです。イギリスの国会議事堂へ行きますとクロムウエルの銅像が建っています。ただあれは胸を張って立っているのではなくて、下を向いて反省するような格好で立っていますが、このクロムウエルの革命の時に、最も左翼で一番困っている人達の利益を代表して、ほんの僅かの数年だったのですけれども、運動したのがレベラーズ、平等派です。そしてこの平等派の中でまた一番左翼の人がディガーズです。ディガーズというのはディッグというのは掘るという意味です。耕すです。ロンドンの少し南のサリー州というところで共同耕作を始めた人たちです。このディガーズの思想を表わすいろいろなパンフレットを書き残したのが、ジェラード・ウィンスタンリです。実はリルバーンやウィンスタンリについて、私は俄か仕立ての社会思想史家なものですから、資料がありませんので立命館大学の図書館へ行行って調べたのですが、これは残念ながらリルバーンもレベラーズもウィンスタンリも何一つありませんでした。私は20年も立命館大学にいて、図書館にそういう本を備えなかったことを大変申し訳なく思っています。ここにもってきたのはホラレンショーというイギリス人が第2次大戦後に書いた『レベラーズとイギリス革命』という本です。英語の原文もあるし日本語の翻訳も出ています。しかしこれは昔モスクワにいた時に買ったロシア語訳の本です。ただこれは第2次大戦直後に出ているので、

わかりやすくおおざっぱに言ってしまえば、いい意味でも悪い意味でもスターリン主義的な立場で書かれているものです。

それでレベラーズについては、そのなかのディガーズについて、ソビエトの有名なヴォルギンという社会思想史家がいるのですが、『社会主義思想史概論』という本の中でディガーズのウィンスタンリの思想について紹介していますので、これを基にしてお話をしていきたいと思います。ここにもってきたこの本がそれです。

勿論イギリス革命については、当時のホップズとか詩人のミルトンとか、人類解放の思想からいうと、こういうところから勉強しなければならないのですが、私は勉強できていませんので、最左翼のディガーズのお話をしてみます。

例えばディガーズは『バッキンガム州に輝く光』というパンフレットで、万人の自由と平等の思想ということを書いていますが、つまり「人間は誰も他人に命令をしたり他人から土地を奪ったり、隣の人を貧乏に陥れたりすることはできないはずだろう。ところが、物欲のために人は、他人に使わせないために土地を囲い、結局全てのものがずい少人数の人々の手に落ち、残り的人々は全てを奪われ奴隷となったのだ。そうした専政を強化し、人々の権利と自由を奪うために、収奪者は王政を作った。王の権力は神の命によるのではなく悪魔の命によるのだ。僧侶は人民をたぶらかして、彼らを専制権力に手渡してしまった。だから王政をなくして普遍的な権利と平等を打ち立てるべきである」というふうなことが出ています。

ディガーズの代表的思想家であるウィンスタンリの思想が一番はっきりと現れているのは、『自由の法』という彼の最後の著作ですが、これは18世紀以前のユートピア思想文献の中で最高のものと見なされています。モアの『ユートピア』とかカンパネラの『太陽の都』と並んで最高のものと言われています。私自身がはっきりと確かめて責任をもっては申し上げられませんが、そういうものです。ウィンスタンリの思想はこういうことです。「新しい社会は、理性と人間性と歴史的正義に基づいて作らねばならない。いまの社会秩序の根本原理の再検討が必要である。そしてそのためには土地の私有と商業を非難し、

土地を売買した者は死刑に処すべきだ。共有地にコンミューンを作るべきだ」というふうなことを言っているわけです。そして「そもそも一人の人間が他の人間よりも富むこと、金持ちになることが必要か」という問題を出して、そういうことは絶対必要ないのだと。「富というものは全て他人の援助によってのみできたものであるから」とし、ここで宗教的な思想が入るのですが、「人間はもともと、みんな平等に神様から与えられている」。そのうちにある人が富み、ある人が貧乏になるが、金持ちになるのは他の人の援助があって金持ちになれるのであるから、彼の富というものは彼個人のものではないのだという考えです。

それで、彼の考えが全部いつも正しいと私は言っているわけではないのです。例えば商業の問題なども、当時の資本主義以前の商業に対する批判であって、現代のものではない。このウィンスタンの提起した問題の中で農業問題、私有財産制度の問題、生産手段共有に基づく共同労働の問題、商業に対する態度の問題、富の源泉は何かということと富の平等の問題、自由の基本的要素としての生存の権利の問題、そういうふうな問題があります。

農業問題については、あえておおざっぱに言わせて貰えば、少なくとも20世紀にソ連や東欧で行われたような農業集団化のやり方は失敗であったということは事実であります。これをどう見ていくかということが問題なわけです。また私有財産制度の問題についていいますと、ディガーズの場合には土地の問題であったけれども、後世の社会主義思想の中ではもっと広く生産手段全般の私有の否定とその公有化の主張になります。後世の社会主義思想、例えばマルクスの場合には、それが生産手段の私有が搾取の根本原因だというふうな考え方になっていきます。それから富はもともと他人が作ってくれたものだというディガーズの考え方は、マルクスでは、資本というのは剰余価値の蓄積されたものだ、『資本論』の第1巻ではそういう分析になっています。

ということで、今度は18世紀のフランスです。18世紀のフランスの社会思想の中ではモレリー、次いで19世紀のフーリエを取り上げてみたいと思います。モレリーは1755年に『自然の法典』という本を書きました。モレリーはエンゲ

ルスが『反デューリング論』の一番最初の章でいろいろな社会主義先駆者の一人として挙げています。モレリーの『自然の法典』というのは、私は実はフランス語がよくできないので小牧近江というパリ大学を卒業したフランス語のよくできる人、彼が桐山という人と一緒になって翻訳したものを持ってきました。モレリーはかなり繰り返しが多いし、論証の仕方も必ずしも十分ではないのですが、フランス革命の時の最左翼でギロチンにかけられたバブーフもモレリーの『自然の法典』を经典としていたと言われており、フランス革命の中では大きな役割を果たしていたものです。この『自然の法典』の中の精神を大きくいうと、第1は、人間は生まれたままの自然に従っていれば一番いいのだということです。これはジャン・ジャック・ルソーなどと似ています。では自然に従うというのはどういうことかという、それは自分を愛することだということです。けれども人間は弱い者だからお互いに求め合う心が出て来る。そういう弱さにおちいらないように、求め合うことと同時に理性というものが必要なのだと。自然のままの純真さというのが人間の本来の姿であって、そのような人間の望み、目的はただ一つの共同の幸福なのだ。というのは、彼自身の幸福というのも共同の幸福から必然的に生まれてくる結果だからだということで、自然の法典というわけです。第2は、これはこれまでの社会主義思想と違います。フーリエとは似ているのですが、それは差異つまり一人一人の個人差を持った全体としての均衡ということです。みんなが全く平等になってしまうということではないのです。

それまでの社会主義思想と違うモレリーの特徴というのは、いい意味での競争心とか野心、それぞれの個人差を持ちながら全体としての均衡を保つ姿を肯定的にとらえていることです。「自然は人間たちに力を分けてやるのに、一人一人について差等を設けたのである。自然はその恵みの沃野を人間全体の共有物として与えたが、そこから生まれてくる収穫は全体として受け取られるとともに、個人ごとに受け取られるようにした」というふうなことを言うのです。「自然はまた、我々の年齢や体質の相違に従って、体力、才知、技量に違いを置くことによって我々の任務には相違のあることを教えた」という思想です。

これは盾の両面があるのですが、自然というのを見ていくと、例えば木を見ても花を見ても全部一つずつ違う。人間も一人一人違う。そういう違いがありながら全体として均衡を保っていくのが自然なのだ、本当にいい姿なのだという考え方です。これは無条件にそのまま私は賛成するわけではありませんけれども、特に現在の条件ではこういう点を非常に考えなければならないと思います。

モレリーの第3番目の考え方は、私有財産権の否定です。モレリーの思想の中で極めて強烈なのは、私有財産権の否定と財産共有の主張です。「この世界に存する唯一の悪は貪欲である。この世界を脅かすペストたる私欲、じりじりと迫ってくるこの社会の悪疾は、いったいどこからその力を得、目に見えない恐ろしい病原菌を得るのであろうか。きっと次の言葉に異義のあるものはあるまい。“所有権のないところには、この恐ろしい病気はない”」というわけです。そしてモレリーは自分で法を作るのです。この法を紹介してみますと、「自然の理法にかなった立法例について。神聖なる基本法第1条、社会における何人も、生活必需品、嗜好品、または日常の業務遂行上の必要品として現に使用するものを除くほか、私有財産を所有することはできない。第2条、全ての市民はその衣食住を公共の負担とされるとともに、公共のために職務に従事すべき義務を負う。第3条、全ての市民はその能力、才能、及び年令に応じて、公共の利益に奉仕すべき義務を負う。各人のなすべき業務に関しては、分配法に準拠してこれを定める」など、その他いろいろあります。

これでモレリーは終わって、これまでの古典的な思想家の中の一つおしまいにシャルル・フーリエについてお話します。1772年に生まれて1837年に亡くなった人です。フーリエの思想については、私は実は泥縄式に勉強したのですが、エンゲルスが偉大な空想的社会主義者と言って3人挙げているのが、ロバート・オーエン、サン・シモン、そしてフーリエです。実はフーリエは必ずしもそれまでの社会主義者とは同じではないのです。2つの特徴があるのです。一つは欲望の発揮ということです。これはこの秋に開かれた経済学史学会で、北海道大学の方がフーリエについて報告をしてくださったのですが、ロベスピエールの節欲、禁欲に対してフーリエは、欲望を發揮させるという違いがある

ということです。彼はそう言っていました、何もロベスピエールに限りません。私の考えではそれまでの社会主義思想の中でフーリエの特徴というのは、人間の持っている欲望を十分に発揮させていこうという考え方です。第2はモレリーと同じなのですが、差異、一人一人の違いの中の均衡ということ言うわけです。

フーリエはいろいろ空想を逞しくするわけです。実は、われわれは空想から科学へ、科学からまた空想へと、これは空想と科学の間を絶えず往復しなければならぬわけです。よくこれまで言われてきましたが、マルクスは空想をたくましくしなかった、将来社会についてはあまり述べないで、現在の資本主義を分析しているのだと言われていましたが、現実、今の人類は新しい社会がどうなるのかということを考えざるを得ない、歴史はそういう処まできています。だから将来のことを考えるのは空想だと言っていたのでは追いつかないのです。やはり我々はそういうふうと考えていかなければならないと思います。

それでフーリエの生涯について簡単に一言で申し上げますが、彼は決して偉大な革命家ではありません。フランス革命の時はドサクサに紛れて随分損をしたりした商人です。フーリエは生涯独身を通して猫や花を熱愛し、軍隊が行進していくといつまでもその後について行ったというような人だったということです。フーリエはいろいろな本を著しているのですが、フーリエにとって特徴的なのは、ファランジュという、みんなで一緒になってやる生活と消費の生活協同体を作ったらしいと言ったことなのです。このファランジュというのはギリシャ語から持ってきた言葉で、古代ギリシャにおける長い槍を持った歩兵の四角い形の密集軍団を意味する言葉だそうですけれども、それを取ってきてフランス語でファランジュと言ったのです。これは大体1,600人から1,800人ぐらいの単位です。そして1人当たり1ヘクタールの農地を持ってみんなでやっていく、そしてみんなの共同宿舎がファランステールという名前なのです。これは四階建てで鳥が翼を広げたような形で、ルーブル博物館にその図があるのだそうです。そこで資本を提供した人と労働を提供した人、才能を提供した人がそれぞれ作った余剰を分け合うのです。資本は3分の1で12分の4です。労働は

12分の5なのです。この辺はフーリエは商人で計算が得意らしくて、単なる3分の1というような言い方はしないのです。労働は12分の5、資本は12分の4、才能は12分の3、そういう割合で余剰を分け合うということです。

そしてフーリエの場合には、私有財産制を存続させようと。「所有がなくなれば勤労意欲も家族愛も失われる」ということです。それからこの辺はこの本（中央公論社「世界の名著」42、『オウエン、サン・シモン、フーリエ』）には出ていないのですが、学会で報告されたのをみますと、ファランジュの中では、金持ちも貧乏人も一緒になって働く。一緒になって働いている中で仲良くなって理解していく。それからもう一つ、性愛ということですが、つまりセックスでは一夫一婦制は否定してしまうわけです。そこで金持ちも貧乏人もそういうふうなセックスを通じてお互いに理解しあっていくというふうなことを言っています。これはフーリエがそう言っているのであって、私がそう主張しているわけではありませんから、そこのところはご理解下さい。

そこでフーリエのファランジュというのはアソシエーションつまり協同社会で、これは最近日本の学会でも協同社会ということについて研究しようという気運があるようです。マルクスの『資本論』でも協同社会と言っていますが、これが前にも触れた「各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件であるような一つの協同社会」ということで、これは『共産党宣言』の1888年の英語版では、エンゲルスが「全国民からなる一大協同社会」をアソシエーションとも言っているのですが、協同社会というのは必ずしも全国民ということではなくて、ファランジュなどもっと小さい単位での協同社会ということも考えられていたようです。

フーリエは『産業的協同社会的な新世界』という本の中で、そういう提案についての彼の思想を述べているわけです。第1は、そういう協同社会を成功させる道は何かというと、それはみんなが楽しんで働けるような機構を見付けることだということです。要するに「貧民や労働者階級は、彼らの状況が不幸ならばお互いに悪意を持って対立したり盗みをしたり、反乱を起こしたりする。他方で社会福祉が保障されるならば彼らは怠惰になる。だから怠惰と協同社会を破

壊す悪徳に対する矯正手段は、労働を快樂に変え、人民の労働に対する頑張り
と人民に前貸しされる最低額のとりたてを保障する産業的魅力的機構の探究
と発見で、みんなが労働を快樂としてやっていけるような、そういう機構を
発見すべきだということです。

それから第2の問題は、差異と結合の問題です。お互いに財産が不平等な
人々がファランジュに来る、あるいは労働についてもそれぞれ違うのだけれど
も、情念とか性格とか思考とか天性の違った人々が協同体のもとで共同して一
緒に働けるようにする。大衆の利益を傷付けることなく、それらを各個人にお
いて発展させるということを考えなければならない。これははっきりと「協同
社会は平等を認めない」と言っているのです。「人間は本能的に平等の敵であ
って、階層的（ヒエラルキー）な（つまり累進的な体制と不可分）差異とか不平
等は協同社会の調和に不可欠である」と言っています。そして「富、性格、思
考、天性の差異は障害ではなくて原動力だ。それなしには情念系列を編成でき
ない」と言っているのです。

ちなみに例の学会の報告で「フーリエの貯蓄銀行」について説明がありまし
た。フーリエは、利子率が10%というのは不公平だということです。例えば1千
万円持っている人の10%は利子が100万円になる。10万円持っている人の10%
の利子は1万円です。そうすると1万円と100万円はものすごく不公平だ。だ
から100万円の利子を手に入れた人は、その利子の一定部分をもっと貧乏な人
に渡すべきだということです。渡せば貧乏な人は感激して有り難いと思う。それ
でみんな一緒になってやるようになる。金持はそれを渡すことによって貧乏人
の反乱を防ぐことができ、金持にとっても利益だと、こういうふうな言い方を
するわけです。

それから3番目は、楽しい労働の問題ですけれども、「この協同社会では労働
は今日の祝宴や芝居と同じくらいに魅力的でなければならない」と言うわけ
です。

それから4番目に、「各人の野心に対する素晴らしい可能性というのはファ
ランジュを自分で作って企業家精神を発揮していくことだろう」と言うのです。

5番目には情念引力で、これはニュートンの引力に関連して、それを人間に持ってきたのですけれども、翻訳で情念引力と言っているのですが、「熟慮反省に先立って自然によってもたらされ、理性や義務や偏見等々の反対にもかかわらず、いつまでも持続する衝動だ」、人間の衝動です。第1はつまり五感の快楽です。第2は愛情関係、人間の結びつきです。第3は普遍的統一、つまり各人の利益の追求と大衆の利益の統一ということになるのだということです。これはちょっと省略してしまいましたが、グルメ、美食の問題、おいしいものを作るということ、かなりフーリエはフランス人らしく言っていますので、それに関連してこういう言い方だけ申し上げておきます。「いかなる立法者も、昼食を義務とすることはなかった。それは昼食が自然的な願望、つまり引力であって、決しておろそかにはしないでであろうからである」。昼飯を食えという法律を決めなくても、誰でも腹が減ったら飯を食うのだということです。

それから6番目に、移り気情念ということです。これは「周期的変化、対照的状况、場面の転換等々や、空想を抱かせ、感覚と感情とを同時に刺激するのに適した新奇さ、に対する要求だ。こういう要求は1時間ごとに穏やかに感じられ、2時間ごとに激しく感じられる。もしそれが満たされなければ人間は不熱心さや倦怠に陥る」。私の話も2時間ぐらいになりますから、もう飽きてきた頃だろうと思いますけれども、そういうことなのです。だから1時間半分、長くて2時間ぐらい働いて、今度は別の仕事をする。1日に7ないし8種類の魅力的な労働を行うということがいいのだというふうなことを言うわけです。

そして7番目に、株式会社を作ってファランジュをやっていくのだということです。この辺は省略します。

ここでこれまでの話とすぐにはうまく結びつかないかもしれないのですが、『インターリンク』（その後『カタリスト』と名前を変えたようですが）という雑誌があります。ここにもってきました。これはイギリスのマルクシスト、進歩的なエコノミスト、その他の人たちが集まってお互いに連絡しあう雑誌です。なかでも社会主義経済学者会議（私も入っていますし、15ポンド払うと誰でも入れるのですが、失業者や給料の低い人はもっと安くするという但し書きがついている学会で

す), この学会が中心になってこの『インターリンク』を発行していて, これは何年か前の号ですけれども, この表紙にこういうことが書いてあるのです。Capitalism is moving so fast, it seems that socialism no longer fits. Yet despite the new look, the exploitation of humanity and nature are real enough. So what do we make of socialism? 「資本主義は非常に急速に進み, 社会主義はもう役に立たなくなったように見える。しかし新しい表面的な現象にもかかわらず, 人間と自然に対する搾取は我々の目に十分見える, まちがいのない現実だ。こういなかで我々は今社会主義をどうしたらいいのだろうか。」ということです。

大分前になりますが, 私は経済原論の講義の1年の最後に学生諸君に向かって, 「講義が終わったのだから, 私の講義に対する批判でも希望でも意見でも何でもいから書け」と言って書いてもらったのです。その中で一番多かったのが「資本主義も悪いけれども, 社会主義もなかなかうまくいっていない。資本主義と社会主義の両方いいところを取った, そういう社会ができないだろうか」という意見でした。その後経済理論学会で, 学会の中心となっている慶応大学の北原勇氏に会った時, 彼が, この頃の学生は云々と言ったので, 私は「立命の学生はこうだ」と言ったら, 大したものだと彼は感心していました。そういう考え方に対して折衷主義だとかいろいろ意見はあると思いますけれども, 私はなかなか当たっていると思います。

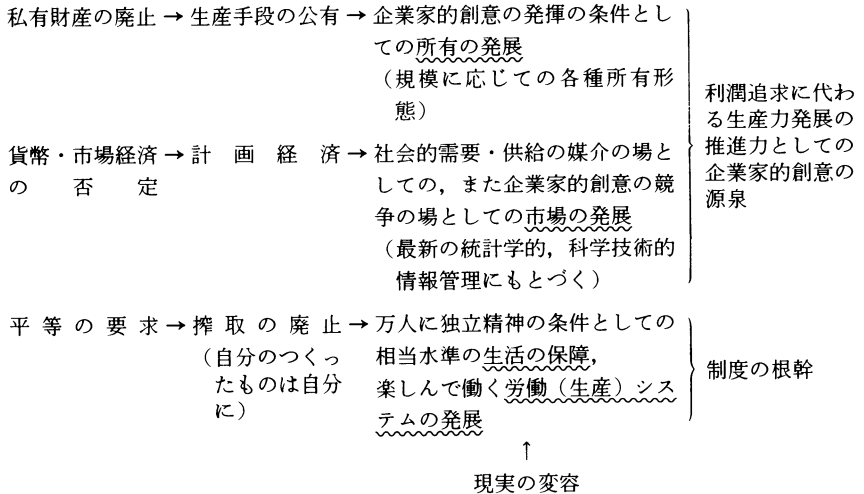
それはそれとして, 実は私は社会主義思想の問題について出来るだけソビエトなどの文献を追っているつもりなのです。いま私が持っているものの中で, 1990年6月の『経済科学』という, これはソビエトの大学や研究所の経済学者たちが論文を出している雑誌ですが, そこでアカデミーの経済研究所のオリセービッチという人が書いている「社会主義思想の分析のために」という論文に, 「社会主義危機の原因は非効率性と, もう一つはマルクスやエンゲルスの思想をそのとおりにしないで, 現実をそれと違ったようなものにしてしまったことだ。個人の自由・平等は保証されないで, 軍事的・官僚的國家ができ, 低い生活水準ができた」とあります。これを直していくということですが, けれども,

オリセービッチに言わせれば、「生産手段の公有と集中計画に民主化と効率とを結合するのは少なくとも可能である」というのです。私の言葉で言えば、要するに計画経済と市場経済とを結びつけることは、少なくとも理論的には可能だということです。けれども、彼は、それよりもっと深い危機がある。それは社会主義思想の危機である。これは体制の危機以上の問題だということです。「正常化した社会主義体制が、経済的効率と政治的自由、社会保障を保障したとしても、それは現在のような社会主義化した資本主義に対する明白な優越性を示すことはできない。せいぜいそれと同列だ」というのです。これだけだったら資本主義の否定者、資本主義の歴史的な否定者、歴史的な承継者ではあり得ないと。ここに社会主義思想の危機があるのだということです。

それではどうすれば危機を解決できるのかというのは、彼の論文には出て来ないのですが、しかし彼は「21世紀には経済の問題よりも社会の問題が中心に

(初期資本主義の発展への封建時代の伝統からの反撥)	(資本主義確立期の強引な方法への反撥)	(資本主義成熟期にその成果の上にたった未来への展望)
---------------------------	---------------------	----------------------------

[近代的(科学的)社会主義]



なってくる」といい、「21世紀には、人間的な社会主義の思想が自由主義的な資本主義に対峙することになる」という言い方をしています。

いろいろ申し上げてきたのですが、最後に現在の段階で私が、これまで社会主義思想についてこういうふうに考えてきて、ではどうなるべきかということについて考えていることを簡単に申し上げたいと思います。それは前の図のようになります。

つまり、われわれが次の社会の姿として構想しなければならないのは、この中の3番目、いちばん右のところです。

これをどのようにして実現していくのかということは、別の次元の問題ですが、すくなくとも、あくまで全員の民主的討議をもとにして、しかもいろいろな試行錯誤のなかで、だんだんといいものをつくっていくしかないことは、はっきりしていると思います。

この講義のなかに出てきた文献の名前は次のとおりです。

大塚金之助著『解放思想史の人々——国際ファシズムのもとでの追想, 1935～40年——』（岩波新書, 1949年, なお特装版が1984年に出ている, また『大塚金之助著作集, 第4巻』（岩波書店, 1980年）にも収録されている）。

大塚金之助『歌集, 人民』（新評論, 1979年, この短歌は『大塚金之助著作集, 第9巻』（岩波書店, 1981年）にも収録されている）。

トマス・モア著, 平井正徳訳『ユートピア』（岩波文庫, 1957年）。

カール・カウツキー著, 渡辺義晴訳『トマス・モアとユートピア』（法政大学出版局りぶらりあ選書, 1971年）。

V. П. Волгин, „Очерки истории социалистических идей”, Москва, 1975.

モレリイ著, 小牧近江, 桐山隆彦共訳『自然の法典』（日本評論社, 世界古典文庫85, 1950年）。

中央公論社, 世界の名著42『オウエン, サン・シモン, フーリエ』（五島茂, 坂本慶一編, 1988年）。

“INTERLINK”, (1989, February/March).

Ю. Ольсевич, К анализу социалистической идеи, („Экономические науки”, 1990, No. 6).

(1990年12月21日, 立命館大学以学館32号教室)